

## 退任挨拶

前沖縄県医師会 副会長  
 (社会医療法人敬愛会 理事長) 宮里 善次



この度、14年間（副会長職6年間）務めてきました県医師会理事を退任しました。

就任当初は穏やかな部門と云うことで、小児科医という事もあり学校保健・感染症部門の担当理事を割り当てられました。

しかしながら、就任後まもなくメキシコ型インフルエンザの世界的大流行が始まり、当時の宮城信雄会長や宮里達也福祉保健部統括官（現県医師会副会長）、糸数班長（現福祉医療保健部長）と連日連絡を取り合っ、県医師会館で情報交換や対応を協議したものです。

そして、最終的に医師会や県行政、保健所や大学病院が一堂に会して、いわゆる“沖縄方式”と呼ばれる診療体制（初発をかかりつけ医、中等症までの入院は民間病院、重症入院は国公立病院が担う）が出来上がりました。

その結果、他府県に比べても効率的な医療提供体制として機能し、その経験と方法論はより進化した形でCOVID-19のパンデミックでも多いに活用されています。

在任中に新型インフルエンザとCOVID-19のパンデミックに遭遇しましたが、いずれの場合も医療行政と医療に精通している宮里達也副

会長が関わって頂いた事は、県医師会と県民にとっては幸運であったと言わざるを得ません。

さて、安里体制になってから、副会長（二人制）の重責を担いました。

任期前半は玉城信光副会長、後半は宮里達也副会長が安里会長の利き腕の右腕となり手腕を発揮して頂きましたので、私はバランス役の左腕といった役割で、重責とは言い難いものとなりました。副会長兼地域医療担当理事として、那覇・中南部に回復期病床の増床を実現できたのが印象に残ります。

ところで、県医師会の活動を支えているのは事務局です。

担当理事と担当事務方がタッグを組んで、様々な問題について対処していきますが、事務方の情報収集力や交渉力、更にはその説明能力と行動力は称賛に値します。

彼等なくしては県医師会の運営は成り立ちません。

14年間の感謝を事務方と県医師会理事会及び会員の先生方にお伝えし、老兵は去りたいと思います。ありがとうございました。

